

ホワイトペーパー

時代とともに進化するETL： 生成AIのためのデータ統合

目次

モダンエンタープライズにおけるデータリーダーの成功を左右する重要な意思決定	3
従来のデータマネジメント時代におけるETLの重要性	4
クラウドデータマネジメント時代におけるETLの重要性	6
堅強なクラウドデータ基盤の構築	7
AIデータマネジメント時代におけるETLの重要性	8
- 3つの新興テクノロジーがもたらすインパクト	8
- オープンテーブル形式	8
- ゼロコピーまたはゼロETL	8
データ統合のための生成AI、生成AIのためのデータ統合	9
- データ統合のためのAI	9
- AIのためのデータ統合	10
時代を超えて通用するバリュープロポジション（価値提案）	11
ETLは変わらずミッションクリティカル —— インフォマティカはエンタープライズグレードのETLにおける実証済みのリーダー	13

モダンエンタープライズにおけるデータリーダーの成功を左右する重要な意思決定

数十年にわたり、データは企業が成功するための生命線となっています。データ主導のインサイトを通じて明確な競争優位性を獲得できることが明らかになって以来、進化し続けるデータマネジメント環境をサポートする業界が新たに誕生し、さまざまなテクノロジーとインフラストラクチャのエコシステムを提供してきました。

1990年代から現在、そして将来に至るまで、ビジネス戦略の要としてのデータの重要性が低下することはありません。

データの活用がビジネスに大きな影響を及ぼすことは明らかですが、どうすれば必要なインサイトを獲得できるのかは必ずしも明確ではありません。

旧来のオンプレミスシステムの時代から、データの価値を引き出すためのカギは、データを効率的かつ効果的に管理して、そのデータをアナリティクスで活用し、意思決定を迅速に行うことにあります。

データ形式やソースからパターンやレイテンシにいたるまで多様であるため、目的に適したデータを活用できる状態にすることは企業にとって決して簡単ではありません。現実問題として、企業は常に**データ統合（データインジェクションを含む）**に苦しんできました。

このような状況に対応するため、インフォマティカは先進の「抽出、変換、ロード」（ETL）ソリューションを提供してきました。このソリューションにより、データユーザーはあらゆる規模のデータを理解し、それを容易かつ一貫した方法でインサイトへと変換し、そのインサイトに基づいて意思決定とイノベーションを推進できるようになりました（図1）。

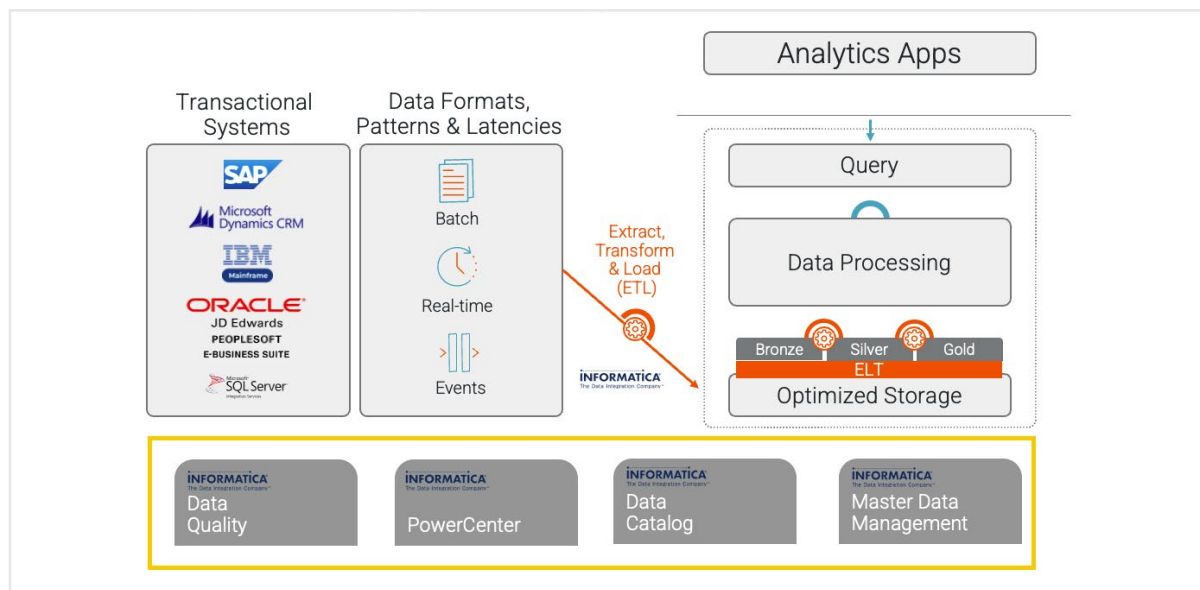


図1：従来型データウェアハウジングのETLにおけるインフォマティカの役割

現在のデータマネジメントテクノロジーは、1990年代の従来型オンプレミスシステムから大きく進化しています。また、ツールに対する需要拡大に対応するためにベンダー環境も急成長しており、さまざまなデータマネジメント機能が提供されるようになりました。ベンダー環境の多様化と競争激化は、顧客に幅広い選択肢をもたらすこととなりますが、一方で、データマネジメント関連のテクノロジーやインフラストラクチャに長期投資するデータリーダーにとっては悩みの種となるかもしれません。

急速に進化する中、現在の投資のままで今後も成果を達成できるのか？競合他社がデータスタックに新しいデータマネジメントツールを次々と導入する中、データによる競争優位性を維持するためには何に投資すべきなのか？

これらは避けて通れない疑問です。特に、AIファーストの時代へと突き進んでいる今、このような疑問をスキップするわけにはいきません¹。

データリーダーは、この意思決定にどのように向き合うべきでしょうか？どうすれば、データによる競争優位性を獲得するための投資を効果的に行いながら、AI対応のデータがもたらす新しい機会を活用できるでしょうか？

このホワイトペーパーでは、企業のデータリーダーに向けてETLがAI時代に果たすミッションクリティカルな役割について説明します。また、エンタープライズグレードのデータ統合ポイントソリューションが数多く存在する中、適正なプロバイダーを選択して、将来も安心できるデータ戦略を策定し、自信を持って新しい機会を活用する方法について紹介します。

従来のデータマネジメント時代におけるETLの重要性

1990年代後半には、「インフォメーションテクノロジー = IT」はすでにメインストリームになっており、多くの企業がオンプレミスのデータベースやデータウェアハウスを導入して、業務データを収集および処理していました。財務、ERP、人事、マーケティング、セールスなど、個別の業務システムを通じてトランザクションデータを収集していました。

収集したデータを保管する場所として、当時は画期的なソリューションとなっていたのがデータウェアハウスです。Oracle、Teradata、SAPなどが提供する初期のデータウェアハウスは、コンピューティングとストレージを一体化し、クエリ処理などの機能、保管可能なデータ容量、パフォーマンス、拡張性などを通じて差別化を図っていました。

一般的なデータウェアハウスには3つのコンポーネントがありました。クエリインターフェイス層、クエリを実行するデータ処理層、そしてアナリティクスモデルに沿ってデータを整理する高度に最適化されたストレージ層です。これとは別に、レポートや視覚情報を作成して、それを組織内のユーザーベース全体に提供するためのアナリティクス層もありました。

しかし、データ収集システム、データストレージシステム、データアナリティクスシステムを備えたこの新しいインフラストラクチャには、ある重要な機能が欠けていました。それがデータ統合機能です。

¹ <https://www.intelligentcio.com/apac/2023/10/13/cios-double-down-on-data-and-ai-investment-over-2024/?form=MG0AV3>

ITリーダーは、どれだけ情報があっても未加工の状態では業務では役に立たないことを、早くから認識していました。「そのまま」のデータはアナリティクスには不向きなのです。暗号のような言葉やデータ項目のコードネームが記載されたレポートは、業務担当者やアナリストには意味不明でした。

形式、パターン、レイテンシの異なるトランザクションデータをさまざまなシステムから収集して、それを1つの形式で、1つの場所に、タイムリーに保管し、アナリティクスで活用するためには、どうすべきなのか？

未加工データをアナリティクスで使えるように「変換」しなければなりません。1993年、インフォマティカは業界の先駆者として、「抽出、変換、ロード」（ETL）ワークフロー、すなわちデータへの理解を深め、その価値を最大限に引き出すソフトウェアを発表しました。データ変換プロセスには、結合、クレンジング、変換、標準化、ビジネスルールや計算式の適用などの重要な要素があります。データを分析モデルにマッピングするためには、まずデータを変換して「準備」しなければなりません。

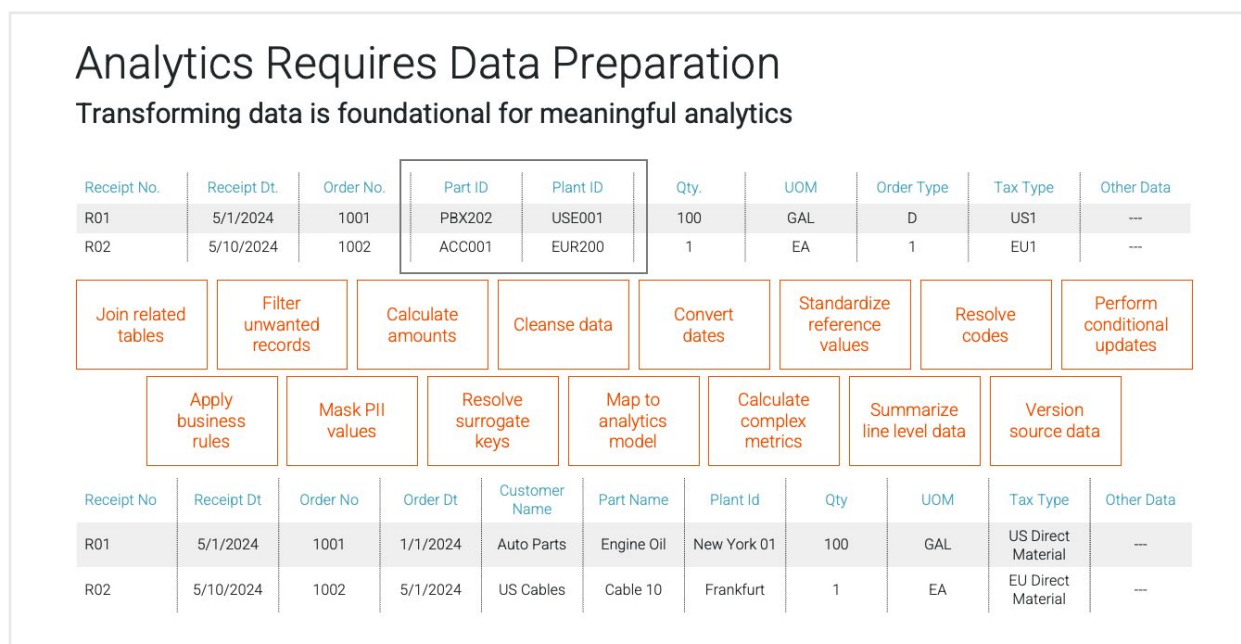


図2：未加工データを実行可能なインサイトに変換するプロセスの簡単な例

ETLプロセスにより、オンプレミスシステムから未加工データを抽出して、それを分析用に準備する際に生じる問題を解決できるようになりました（図2）。異種システムのデータを論理的に抽出、変換（補完、エンリッチ化、連携）、保管することで、アナリティクスシステムでは、それを誰もが理解し行動を起こせる形式で表示できるようになりました。

そして画期的なPowerCenterにより、このイノベーションを他のデータ統合ソリューションへと拡張することで、幅広いインジェスチョンや処理パターンに効果的に対応できるようになった結果、インフォマティカは2015年にデータ統合におけるリーダーとなりました。

クラウドデータマネジメント時代におけるETLの重要性

2015年、クラウドテクノロジーの登場により、データマネジメントの世界が一変しました。IaaS（サービスとしてのインフラ）、SaaS（サービスとしてのソフトウェア）、PaaS（サービスとしてのプラットフォーム）により、企業はかつてない柔軟性、俊敏性、スケールメリットを獲得できるようになりました。

SaaSアプリケーションの数が爆発的に増えたことで、分析すべきデータも増えました。また、コンピューティングとストレージを切り離した新しいデータアーキテクチャにより、ワークロードに応じて、両者を水平方向に拡張できるようになりました。ストレージの最適化により、すべての企業データを安価なクラウドストレージ上のデータレイクに分割して格納できるようになりました。

一方で、これらのイノベーションに伴い、複雑化が進み、新たな課題も発生しました。

企業にとって、データを理解することがかつてないほど困難になってきたのです。平均的な企業では約1,000ものアプリケーションが使用されています。膨大な量のデータにより、データの断片化が進み、粗悪なアナリティクス結果を招いていました。また、業務担当者は、適時的なアナリティクスだけでなく、データをモデル化して将来を予測したいと考えるようになりました。その結果誕生したのが、データサイエンスアプリケーションと予測的アナリティクスです。

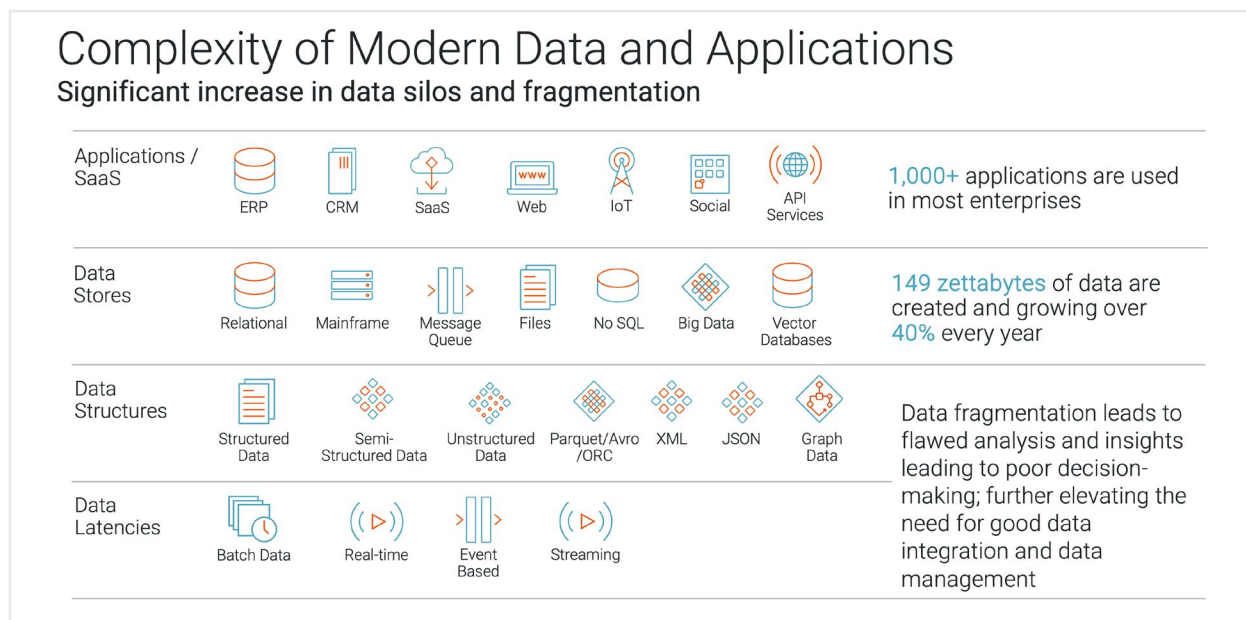


図3：クラウドデータマネジメントアーキテクチャの進化に伴い進む複雑化

堅強なクラウドデータ基盤の構築

クラウドの登場により、データストレージの運用と経済性は簡素化したものの、データの変換と統合の問題は解決しませんでした。それどころか、新しいソース、形式、システム、レイテンシのデータが複雑なハイブリッドクラウドアーキテクチャで運用されるようになり、問題が増大しました（図3）。

オンプレミス環境にあるシンプルで限られた構造化データを理解するためにもETLが必要だったことを考えれば、クラウド時代にはETLの必要性はなおさら増すことになります。企業は、新しいソース、プロセス、アプリを使用して、インサイトやアナリティクスを抽出する（抽出し続ける）ための効率的な方法を緊急に必要としていました。

この変化にいち早く気づいたのが、インフォマティカでした。

クラウドの登場を受けて、インフォマティカはクラウドネイティブなデータ統合ソリューションを開発しました。モダンかつクラウドネイティブなアーキテクチャにより、技術担当者であっても、業務担当者であっても、最も効率的で使いやすく、インテリジェントな方法を通じて、複雑なデータにアクセスし、読み取り、そのデータに基づいて行動できるようになったのです。

1993年から現在に至るまで、データマネジメントにはいくつかの重要な分岐点がありました。インフォマティカは、そのすべての分岐点において、率先して新しいベンチマークを打ち立て、新しい機能（データ品質、データカタログ、マスターデータマネジメント（MDM）など）を追加することで、新しい複雑な使用事例やデータ関連の法規制フレームワークへの対応を支援してきました。

過去30年間で、アーキテクチャ、テクノロジー、ベンダーは変化してきましたが、インフォマティカは、オンプレミス環境、クラウド環境、ハイブリッド環境向けのエンドツーエンドのデータ統合におけるリーダーとしての立場を変わることなく維持し続けてきました。

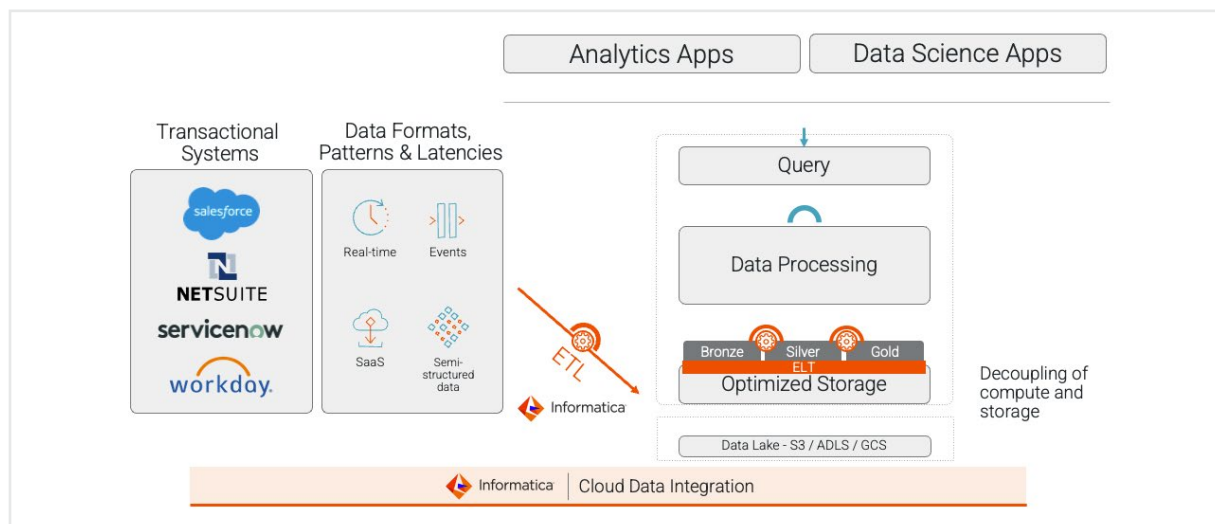


図4：クラウドデータマネジメント時代のETLにおけるインフォマティカの役割

AIデータマネジメント時代におけるETLの重要性

3つの新興テクノロジーがもたらすインパクト

企業は、進化するデータマネジメント環境への対応に取り組み続けていますが、オープンテーブル形式、AI、ゼロコピー、ゼロETLなど、新しいトレンドが近年続々と登場しています。

変化と競争の激しい環境で勝ち抜くためのデータ戦略を入念に計画しているデータリーダーやテクノロジーリーダーにとって、現在は成功を左右する重要な瞬間となっています。

オープンテーブル形式

アナリティクスが登場した当初から、データを標準化するための方法が模索されてきました。標準化により、データのアクセス、リーチ、有効活用が飛躍的に向上するためです。この標準化を達成するために、XML、JSON、Parquet、Iceberg、Delta Lakeなど、新しいビッグデータ形式がいくつも登場しました。これらのデータ形式により、データセットの保管、アクセス、管理をより容易に行えるようになりました。

コンピューティングとストレージはすでに切り離されていましたが、オンザフライ (OTF) で大規模データセットの運用とクエリを直接実行できるようになったため、最適化されたストレージの必要性が最小限になり（または完全になくなり）、アーキテクチャのコストをさらに削減できるようになりました。

これらはいずれも顧客にとってメリットとなります。その一方で、オープンテーブル形式によってデータマネジメントを標準化できるものの、XMLに始まり、JSON、Iceberg、Delta Lakeなど、形式の標準が複数存在することには留意が必要です。加えて、国際電子データ交換 (EDI)、グローバルサプライ標準 (GS1)、国際標準化機構 (ISO)、米国医療保険の相互運用性と責任に関する法律 (HIPAA)、Health Level 7 (HL7) のような、業界に特化した形式もここ数十年で数多く登場しています。

企業は、ますます複雑化するデータテーブルを動的な環境に格納しようとしています。データを抽出して、それを新しいデータ形式に変換するための手法はこれからも必要となります。形式、標準、データの数が増えるほど、特定のベンダーに依存することなく、すべてを連携させて、規模を問わず高パフォーマンスを発揮できる、エンドツーエンドのデータ統合基盤の重要性が高まることになります。

ゼロコピーまたはゼロETL

最近では、一切のデータ変換を行うことなく、ウェアハウスやレイク内のトランザクションデータに対して直接アナリティクスを実行できると主張するクラウドデータウェアハウスベンダーもいます。しかし、この主張をそのまま鵜呑みにするわけにはいきません。

トランザクションデータシステムに対してデータを直接クエリ処理しているので理論上は可能ですが、このような場合であっても、ベンダーの主張とは反して、通常はデータがコピーされています。重要なのは、いわゆる「ゼロコピー」でどのようなアナリティクスを実行できるのかということです。例えば、マーケティング部門がゼロコピーを使用してCSVをクエリ処理してイベント参加者数を確認することはできます。しかし、パイプライン生成やキャンペーンパフォーマンスなどの詳細なインサイトを獲得するためには、ETLプロセスを通じてデータを変換しなければなりません。

特定の情報を見つけるためのアドホックなデータ検索には有効かもしれませんが、360度のデータに基づく詳細な分析インサイトを求めている場合はデータ変換が必要です。つまり、詳細な分析クエリを通じてエンタープライズの分析ワークロードに対応し、データによる競争優位性を獲得するためには、本格的なETLプロセスが不可欠なのです。この事実は現在も変わっておらず、AIの時代に入っても変わることはないでしょう。

データ統合のための生成AI、生成AIのためのデータ統合

データ統合のためのAI

AIはデータ統合の効率性に影響を与えていますが、同時に、AIはデータ統合の使用事例でもあります。Ventana社は先頃実施した調査の結果から、データから迅速に価値を引き出すために、2027年までにデータ処理の4分の3でAIと機械学習（ML）が活用されることになると断言しています。²

データパイプラインを作成および運用化するためのAI搭載メタデータエンジンには、高速性、正確性、拡張性、パフォーマンスを飛躍的に向上させる可能性があります。また、AI搭載のローコード/ノーコードツールにより、データマネジメントの容易性と生産性が高まり、業務担当者は本来の業務に専念できるようになります。

インフォマティカでは、メタデータベースのインテリジェントエンジン**CLAIRE**[®]を搭載した、クラス最高かつ生成AI対応の自然言語処理（NLP）ベースサービスを2種類提供することで、データ統合に変革をもたらしています。

- **CLAIRE OPT**: データディスカバリ、データ把握、データ品質をサポートするインターフェイス
- **CLAIRE Co-pilot**: さまざまなデータマネジメント作業を自動化して、簡素化と拡張を図りながら、データチームに迅速にデータを配信

これらのサービスにより、自然言語プロンプトを通じて、データ統合パイプラインを探索、準備、作成、実装できます。その結果、データの民主化を推進して、各事業分野（LOB）ユーザーの意思決定を改善し、データエンジニアはより高度な使用事例の解決に専念できます。

期待できる効果は次のとおりです。

- データ分類にかかる時間を最大50%短縮。
- データディスカバリにかかる時間を最大100倍高速化。
- 生産性を最大20%（またはそれ以上）向上。
- 重要なデータインサイトをより短時間で発見。

² Wakefield report, https://www.informatica.com/lp/speed-scale-and-simplicity-with-modern-data-integration_4536.html

AIのためのデータ統合

AIの成功を左右するのはデータです。しかし、AI対応データは、通常の「高品質」データとは少し異なります。AI対応データの場合、微妙なニュアンスの追加が出力結果に影響を及ぼすことがあります。600人のデータリーダーを対象に実施された『**CDOインサイト2025調査**』によると、回答者の92%が、過去に発見された問題に対処することなく新しい生成AIパイロットが推進されていることに懸念を示しています。また、38%がデータ品質に対する信頼性の欠如に関して、43%が出力結果の信頼性に懸念を持っています。³

AIのためのデータ統合とは、AIエンジニアリング用のデータパイプラインを実装するための作業です。このプロセスには数多くのステップがあるものの、以下の2つの基本的なステップでは堅強なデータ統合機能が必要となります。

1つ目は、大量の構造化、半構造化、非構造化データを抽出して、専用のデータストア（Vector DB、Graph DBなど）にロードするプロセスです。このプロセスでは、チャンク化プロセスや埋め込みプロセスと呼ばれる特別な変換プロセスを用いて、データを表す「ベクトル」を作成します。

2つ目は、直接またはAIアプリ経由でAIクエリプロンプトを発行するプロセスです。このクエリが検索拡張生成（RAG）パイプラインを通して小規模／大規模言語モデル（LLM）とやり取りすることで、AIの応答が生成され、そのデータに企業データや前のプロセスで作成したベクトルトークンを融合することでコンテキストを追加します（図5）。

インフォマティカは、これらの重要なAIプロセスを自動化するだけでなく、将来に目を向けながら、あらゆるAI使用事例に対応できるよう、連携性に優れたデータマネジメントプラットフォームに機能を追加し続けています。そのため、モダンデータアーキテクチャに対する投資をそのまま新しいAI時代でも活用できます。

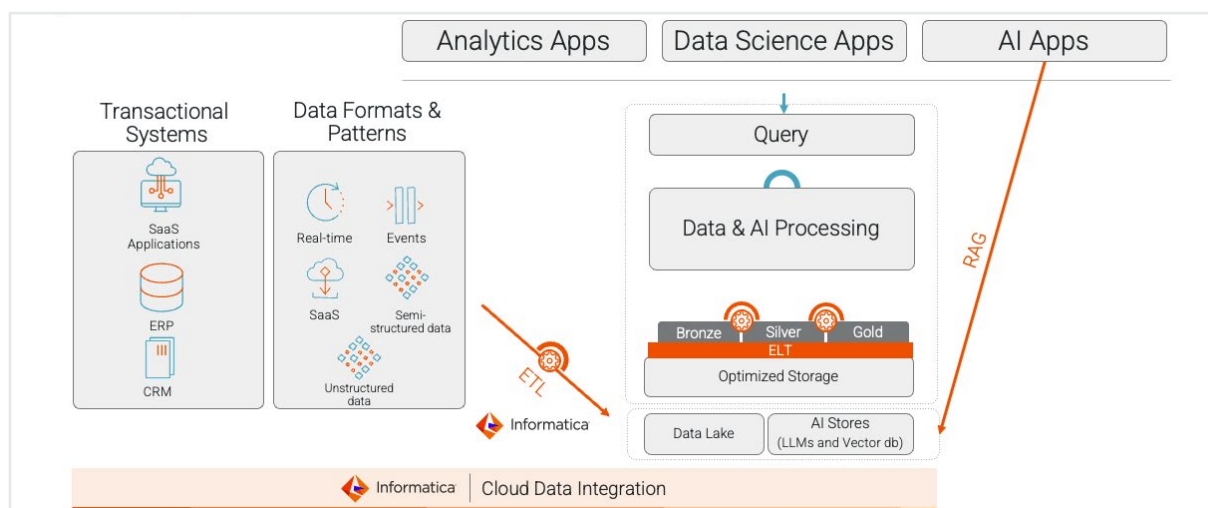


図5: AI時代のETLにおけるインフォマティカの役割

³ Wakefieldレポート、『**CDOインサイト2025：600人のデータリーダーが明かす生成AI活用のROIと課題**』、2025年1月

時代を超えて通用するバリュープロポジション（価値提案）

この激動の30年間にわたって、インフォマティカは、5要素の価値フレームワークを指針として、データ課題を解決してきました（図6）。

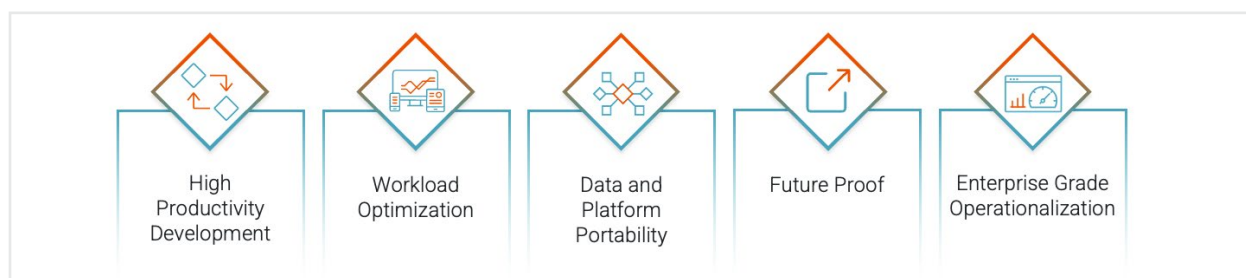


図6：インフォマティカの5要素の価値フレームワーク

インフォマティカは、データ統合ソリューションに関するGartner® Magic Quadrant™において、19回連続でリーダーの1社に位置づけられています。⁴

数え切れないほどの企業が、Informatica PowerCenterとクラウドベースの**Intelligent Data Management Cloud (IDMC)** の12の重要機能を活用して、堅強かつエンドツーエンドのデータ統合基盤を構築し、業務アナリティクス、リアルタイムアナリティクス、データサイエンス、AIの使用事例に対応してきました。

その中の1社がPaycor社です。同社は、30年以上にわたって人事ソフトウェアを提供してきた大手プロバイダーです。40,000社以上の中小企業のリーダーや人事部門が、同社が提供するシンプルなオールインワンプラットフォームを活用して、大規模なテクノロジーのシフト（モバイルデバイスの誕生、リモートワーカーの管理など）に対応してきました。その**Paycor社**は現在、新たな画期的テクノロジーを活用しようとしています。それが人工知能（AI）です。インフォマティカとSnowflake社のパートナーシップを基盤に開発されたマルチテナントのクラウドデータウェアハウスにより、企業は自信を持ってAI時代へと円滑に足を踏み入れ、信頼できるデータに基づいてさまざまな新しい使用事例に対応できるようになりました。

Paycor社は、ここ1年だけでも20を超えるAIイニシアチブ（チャットボット、コパイロット、仮想アシスタント、機械学習アルゴリズムなど）を立ち上げています。また、大規模言語モデル（LLM）に投資することで社内チームによる自動化とコスト削減を支援し、社外のAI搭載製品ラインをサポートすることで顧客の増加を促進しています。

多くの企業がスキル不足やデータ品質課題によって**生成AIパイロットの運用化と拡張に苦労している**中、Paycor社はIDMCによるモダンなAI搭載データマネジメント基盤で、野心的な戦略を力強く進めています。

⁴ Gartner® Magic Quadrant™ for Data Integration Tools, Thornton Craig, Sharat Menon, Robert Thanaraj, Michele Launi, Nina Showell, December 3, 2024. GARTNER is a registered trademark and service mark of Gartner, Inc. and/or its affiliates in the U.S. and internationally, and MAGIC QUADRANT is a registered trademark of Gartner, Inc. and/or its affiliates and are used herein with permission. All rights reserved.

Gartner does not endorse any vendor, product or service depicted in its research publications, and does not advise technology users to select only those vendors with the highest ratings or other designation. Gartner research publications consist of the opinions of Gartner's research organization and should not be construed as statements of fact. Gartner disclaims all warranties, expressed or implied, with respect to this research, including any warranties of merchantability or fitness for a particular purpose.

また、さまざまな業界の企業を対象に実施したインフォマティカの内部ベンチマーク調査によると、IDMCは、コストとパフォーマンスにおいて競合製品を一貫して凌駕しており、他のベンダーと比べて平均42%のコスト削減、4.5倍の高速パフォーマンスを記録しています。これは決して偶然の産物ではありません。信頼できる、目的に適した、AI対応データに基づいて、既存および新規の使用事例を推進するための、将来にわたり安心な基盤に投資してきた結果なのです(図7)。

生産性の高い開発	エンドツーエンドのオンプレミスデータパイプラインマネジメント	エンドツーエンドのクラウドデータパイプラインマネジメント
すぐに使い始められる統合機能を活用した直感的な設計体験により、人材とリソースを最適化し、データを民主化	現在の先進的なエンタープライズの多くが、GUIベースのローコードインターフェイスにより、使用率を促進して、データ主導の文化を醸成し、データを通じて競争優位性を獲得	すぐに使い始められるコネクタと統合プロセスを活用したノーコードの設計体験により、開発者の生産性が10~20倍向上し、正確性と拡張性が改善
ワークロードの最適化 顧客に複数の導入オプションを提供し、統合ワークロードのスマートな最適化を支援	コンピューティングとストレージにわずか25%のコストを追加するだけで、規模やプラットフォームを問わず、大量のワークロードを実行	ワークロードをあらゆる環境(オンプレミス、ハイブリッド、エラスティック、サーバーレス、CDW内)に実装して、パフォーマンス、拡張性、コスト、セキュリティを最適化し、 全体的なコストパフォーマンスを7.5倍向上
データとプラットフォームの移植性 50,000超のメタデータ認識型コネクタを提供するインフォマティカは「データの永世中立国」	数千ものコネクタとの接続性により、すぐに使い始められ、データの新しい可能性を開拓	50,000超のメタデータ認識型コネクタおよび特定のプラットフォームに依存しない設計とランタイムにより、従来型のメインフレームからVector DBやLLMまで、すべてを容易に接続
将来も安心 テクノロジー、プラットフォーム、アーキテクチャが変わっても、ビジネスロジックを維持	オンプレミスの時代からクラウドの時代に至るまで、データ統合をサポートしてきた信頼性	クラウドプラットフォーム、データウェアハウス、テクノロジースタック、データソース、データターゲットを変更しても、ビジネスロジックをシームレスに移行可能
エンタープライズグレードの運用化 最も要求の厳しいワークロードについても、拡張性、可用性、信頼性、管理能力、セキュリティを一貫して実現	規模を問わず、信頼できるパフォーマンスを維持しながら、複数の使用事例のための複数のパイプラインを運用化	CI/CD、DataOps、FinOps、ワークロードマネジメントにより、データライフサイクル全体を管理。すべてのデータセンターをカバーするグローバルなリーチ。99.9%のSLA保証により、あらゆるデータ統合課題に対応可能

図7:時代を超えて価値を発揮するインフォマティカのバリュープロポジション(価値提案)

ETLは変わらずミッションクリティカル —— インフォマティカはエンタープライズグレードのETLにおける実証済みのリーダー

これまでの30年の歩みを見ても分かるとおり、データソースとデータ形式の複雑化に対応すべく、データマネジメントテクノロジーは今後も進化を続けることになります。一方で、システム、ストレージ、プロセスがどれだけ進化しても、正確かつ完全なデータを継続的に供給するためには、ETLが必要です。データリーダーとITリーダーを対象に実施した最近の調査によると、今でも**78%のチーム**がデータオーケストレーション、複雑なツール、データの種類、量、品質の管理に関する課題に直面しています。このようなチームがデータ統合課題を克服してAI対応を推進するためには、堅強なETLソリューションに投資することが最良の解決策となります。

Gartner社は次のように述べています。「業務／分析／AIインフラストラクチャの使用事例をサポートする優れた機能を求める組織は増えているため、データ統合ツール市場は依然として有望な市場となっています。データ統合機能により、組織やシステムの垣根を越えて、データをインGEST、共有、利用できるようになります。そのため、ますます多くの組織が、データ／アナリティクス／AIインフラストラクチャをモダナイズするための包括的なデータ統合機能を求めるようになっていきます」⁵

先見の明のあるデータリーダーは、ETLの重要性が低下することはないことを知っています。データ主導の未来に備えるための最良の対策は、データのライフサイクル全体をサポートできる、特定のベンダーに依存しない、次世代アーキテクチャのための堅強なデータ統合基盤に投資することです。これにより、妥協することなく、コンプライアンスとセキュリティを確保し、あらかじめ組み込まれたデータ品質機能を活用できます。

IDMCは、クラウドワークロード向けに最適化され、豊富な実績に裏打ちされた、将来も安心のソリューションです。モダンな使用事例や最新のアーキテクチャとともに進化してきたIDMCにより、規模を問わず、エンタープライズグレードのアナリティクス／エンジニアリング／AIの使用事例に対応できます。

オンプレミス時代のデータ戦略をシームレスにAI時代向けの戦略へと移行させ、将来も安心な基盤を構築する方法について、詳しくは**こちら**をご覧ください。

⁵ 同上

企業情報

インフォマティカ（NYSE：INFA）は、AIを活用したエンタープライズ向けクラウドデータマネジメントのリーダーとして、データとAIが持つ変革の力を形にするための支援を通して、企業の最重要資産であるデータとAIに命を吹き込んでいます。Informatica Intelligent Data Management Cloud™（IDMC）はAIを搭載した業界先進のソフトウェアです。AIを搭載したエンドツーエンドのデータマネジメントプラットフォームを通じて、マルチクラウドやハイブリッドシステムに分散したデータを接続、管理、統合し、データを民主化して、ビジネス戦略を最新化できます。世界約100か国でFortune 100企業の80社以上がインフォマティカのソリューションを活用して、データ主導のデジタル トランスフォーメーション（DX）を推進しています。インフォマティカがデータとAIの価値を最大限に引き出す。

本社
〒105-6226 東京都港区愛宕2-5-1
愛宕グリーンヒルズMORIタワー26階
電話：03-6403-7600(代表)
FAX：03-3433-1021

informatica.com/jpx.com/Informatica

お問い合わせ

Where data & AI come to



IN09-5118-0325

© Copyright Informatica LLC 2025. Informatica、Informaticaロゴは、米国およびその他の国におけるInformatica LLCの商標または登録商標です。インフォマティカの商標の最新版は、<https://www.informatica.com/jp/trademarks.html>をご覧ください。その他すべての企業名および製品名は、各社が所有する商号または商標です。本文書に記載されている情報は、予告なく変更されることがあり、現状のまま提供され、明示または黙示を問わず一切の保証を伴いません。